



現代の文学 = 34

有馬頼義集



聖夜の欲情

遺書配達人

四万人の目撃者

○ 終身未決囚

空白の青春

河出書房新社

現代の文学 34 有馬頼義集



© 1964

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和 39 年 10 月 1 日 初版印刷
昭和 39 年 10 月 5 日 初版発行

定価 390円

著 者 有馬 頼 義
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 高 橋 武 夫
装 幀 原 弘 (N. D. C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本・美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

聖夜の欲情	三
遺書配達人	二一
四万人の目撃者	二五
終身未決囚	四一
空白の青春	四七

解 年

説 譜

.....

山 本 健 吉 : 四六

..... 四七

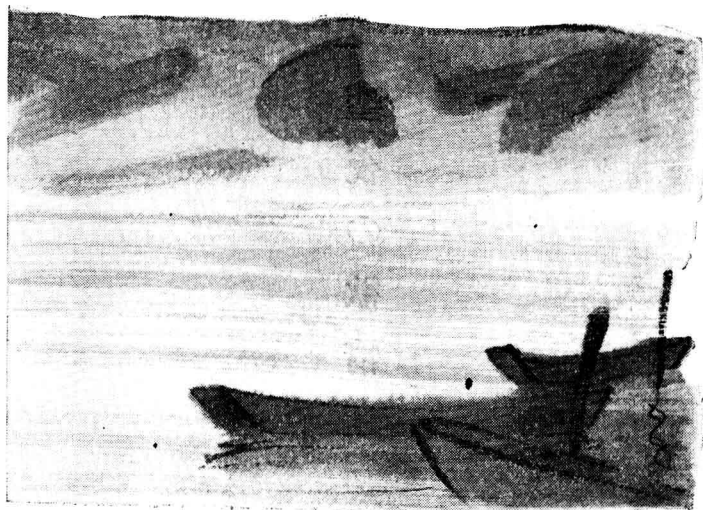
挿画 竹谷富士雄

沢田重隆

写真 三木 淳

有馬賴義集

聖
夜
の
欲
情



1

長男の映が十六歳、長女の春香が八歳、次男の泰が七歳の夏の終りに、春香と泰が、学童疎開をしていた信州上諏訪の湖の近くの旅館へ、映が一人で訪ねてきた。昭和十九年の九月のことである。教師に許可をもらって、三人は、湖の畔を歩いた。映が来たときから、春香は、疎開する前に会ったときの映とは、別人のような印象を感じた。映の目は、ひかっていた。

「春香は、いくつだ？」

「八つだわ」

「泰が七つか」と、映は、ひどく大人びたものの云い方をした。「十年経つと、十八歳に十七歳か」

「お兄さんは、何を考えているの？」

「お前たちの、年齢のことを考えていた」

「何故、年齢のことを考えているの？」

「春香は、戦争って、何だか、知っているか？」

「わからないわ」



「泰は？」

「戦争って、戦争だ。国と国が、たたかうことだ」

「先生が、そう云ったのか？」

「先生も云ったけれど、いろんなひとにも云ってるよ」

「泰の自分の考えは、どうなんだ？」

「……………」

映は、まだその質問が、泰には無理だということに気付いたようであった。それから先はひとりごとのようになった。

「戦争は、世界中で起っているし、僕が、泰位の年齢の頃から、続いている。沢山の大人たちが死んだ。日本は、兵隊が足りなくなったんだ」

「そんなこと、知ってるよ」と、泰が云った。「先生も、そう云ってた。日本に残っているのは、老人と女と子供だけだって。だから、僕たちも早く大きくなって、戦争の手伝いをしなければいけない、って」

「手伝いか」と、映は笑った。

太陽が山の端に近付くと、湖面が、突然変色した。東側の山が、夕陽を受けて輝いた。

「春香も、泰も、よくきいてくれ」と、映は、流木に腰をおろした。「僕は、戦争に行く」

「お兄さんが！」

「学校へ行けば、戦争へは行かなくてもいい年齢だ。し

かし、僕は、行きたい」

「……………」

「ずい分前から、考えていたんだ。一度お父さまに相談したら、何も無理に志願をして行かないでもいい、と認められた。お母さまも、同じことを云った。しかし、僕はもう大人だろう」

「お兄さんは、いくつ？」

「十六歳だ」

「それで、何処へ行くの？」

「千葉県の黒磯に、少年航空隊があるんだ。志願の少年ばかりが、そこに集まって訓練を受けている。そこへ行くつもりだ」

「お母さんには？」と、春香がきいた。

「それなんだ」と、映は云った。映の表情に、そのときかげがさしたようであった。「黙って行く」

「黙って、——何故なの？」

「云えば、とめられるだろ。もう願書を出してしまった」

「お父さまにも？」

「勿論さ」

「じゃあ……」

「何故、春香と泰に話したのか、というんだろう。そうだ、何故かな」

「決心は、かわらないの？」

「かわらないよ。もう、きめてしまったんだ」

「そう」

春香の年齢で、それ以上批判めいたことは云えなかった。それを計算して、映は、小さい妹と弟に、別れを云いに来たのだろうか。春香の目から見ると、映は、確かに、もう大人であった。二人がもっと幼なかった頃の記憶は、今でも消えずに残っているが、記憶は記憶であり、現実には自分の前に立っている映は、大人であった。疎開する前、よく、映の勉強部屋に当てられた二階の六畳へ、春香はしのんだ。学校へ行っている映が、そこにいる筈はなかったが、春香は、大人になりかかっている、自分の知らない映の部屋の匂いを吸い込んだ。父の良孝の、煙草くさい部屋とも違い、それは母のつけているかぐわしい香料の匂いとも違った。まぎれもなく、これは、かつて子供同士であり、そこから、少しずつ身を引いて行ったような映の匂いであった。春香が四つの時、映は十二歳であった。その頃までは、よく遊んでくれた。春香が、地味な官吏である良孝や、一日中殆んどものを云わない母の佳子よりも、兄である映を、より強く印象し、愛したのは、そのためのようであった。春香は、母に抱かれた記憶を、あまり持っていない。芝生にござを敷き、ままごとや、人形あそびをしている背中に陽があたっていた。そして、そんなとき、まぎれもな

く、半ズボンから、白い、長いすねを出している映が、傍にいた。

「神さまって、なに？」と、春香は、きいたことがあった。

「偉いひとさ」と、映は答えた。「でも、見えないんだ。どこにもいないけれど、どこにでもいるんだ。そして、僕たちが悪いことをすると、叱る」

「足ながおじさんみたいなの？」

「違うね。春香が、もっと大きくなったら、神さまになれるよ」

「いくつになったら？」

「そうだな。十六か、十七か。それから、多分、死ぬときにね」

「神さまにおねがいすると、なにかがかなえられるの？」

「多分ね。しかし、サンタクロースのおじいさんとは違うよ。何かがほしい、と思う。それを何でもくれるのは、サンタクロースで、それが本当にそのひとをしあわせにするものならば、くれるのが神様だよ」

そのときの映の言葉の意味を、春香は、今でも完全に理解したとは云いがたい。映は、戦争へ行くことを、神さまに相談したのだろうか。

「お兄さん」と、春香は云った。「兵隊さんになったら、

軍服を着るのね」

「そうだ。そして、飛行機に乗るんだ」

「素敵だな」と、泰が云った。「この上を、飛んでくれよ。みんな、旗を振るよ」

「いつかな」と映は、泰の坊主頭をおさえた。「さっき、話しかけていたことを、思い出したよ。十年たって、お前たちが幾つになるか、数えただろう」

「ええ」

「僕は、その頃、自分がいいいかも知れないと考えたんだ。お前たちが、お父さまや、お母さまの役に立つかどうか、とね」

「お兄さんは、そんなに長く帰って来ないの？」

「すぐに帰って来るかも知れないし、永久に、帰って来ないかも知れない」

「永久って、なにさ？」と、泰がきいた。

「永久って、——つまり、いつまでたっても、さ」

「わからない」と、泰は首をかしげた。

春香はふっと、映が、自分が死ぬときのことを考えているのではないか、と思った。それならば、父にも母にもかくれて志願をした兄が、自分達にだけ別れを告げに来た意味が、わかるような気がした。夕暮のように、悲しみが、春香の心をとぎしはじめたが、そんなとき、口に出して、何と云ったらいいか、春香には、わからない

い。

「春香」と、映は云った。「久谷を知っているね」

「ええ」

「久谷にだけ、僕の気持を話したよ。久谷も最初は反対した。戦争は、自分達がはじめたんじゃない。そして戦争は、それをはじめた人の手で、いつかは終る。久谷はそう云った。僕たちは、今、いっしょうけんめいに勉強して、次の時代の日本のことを考えなければならない、というんだ」

「……………」

「久谷の云うことは、僕にもわかってる。しかし、自分の気持を、どうにも出来ないことがあるだろう？」

「……………」

「勉強を、しなければならなくてわかっていても、どうしても、気が散ることがあるだろう？僕は考えぬいたんだ。久谷は久谷だ。僕は、僕だ。むずかしいから、わからないかも知れないが、いっしょうけんめい生きようとしていて、どうしても死ななければならないこともあるんだ」

「いつ、行ってしまおうの？」

「十月一日に入隊だ」

「送りに行きたいわ」

「僕は、こっそりうちを出て行くんだぜ。だから、此処

へ来たんだ。今日が、さよならだ」

「でも、もし……………」

「手紙を書くよ、春香。出せても、出せなくても、手紙を書く。春香は、兄さんに話しかけたいときには、日記をつけるんだ。僕だけに見せる日記をね。帰って来られたら、読む」

空が茜色になり、湖をとりかこむ山々は、黒いかげになった。茜色の空と、黒い山の境に、ほそい金色のふちがあり、茜色の空の上は、澄んだ、黒ずんだ蒼空であった。

2

高原の秋は早い。湖の色がためたく見えはじめ頃、春香は、思いがけず、絵を描きに行った裏山から呼び戻され、旅館の玄関に腰をおろしている久谷康国を見た。

兄の映が、この友達を持っていることを、今までかくべつ意味ありげに考えたことはなかったのだが、映の話をきき、映が、久谷にだけ、今度の決心を告げ、反対された、ということを考えあわせると、ことごとく正反対に見える映と、久谷の結びつきがわかるような気がした。

「この間、兄さんが来たんだってね」と、久谷は云った。

「ええ」

「僕が反対したことも、きいただろ？」

「ええ」

「お父さんや、お母さんに黙って出て行くのだけはいけない、と僕は云ったんだ。それで、映と二人で、頼んできた。承知してもらうまでに、一週間かかったよ」

「じゃあ……」

「きまった。君の兄さんは、正々堂々と、出征することになった。それで、君を迎えに来たんだ」

こっそり行くことと、正々堂々と出て行くことの違いを、春香はまだ理解しなかったが、久谷が迎えに来てくれた、ということは、春香も、また正々堂々と兄を送れる、ということであつた。

「先生には、もう話してある。支度をしてきたまえ」

「泰は？」と春香はきいた。

「兄さんは、君だけ連れてきてくれ、と云った」

「そう」

世間の目から見れば、そんなことは、もはや日常茶飯事に過ぎないが、支度をしているうちに、春香はいいようにのまないで、飽しさを覚えた。

上諏訪の駅まで送りに来てくれた先生が、

「氣をつけて行くんだよ。泰君のことは心配しないでいい」と云ったとき、少し涙がこぼれた。春香は、再びそ

こへ戻ることがないことを予感していたようであつた。

列車は、秋の高原を走り下り、甲府をすぎる頃から、暑くなつた。関東平野は、残暑の底に横たわっているようであつた。

「十月一日ですか？」

「そうだ。春香ちゃんは、さみしいかい？」

「いいえ」

久谷は、それからしばらくして、こう云つた。

「志願で出征する兄さんの考え方は正しい。立派だと思う。しかし、反対して、学校に残る僕のことを、軽蔑しないでくれよ」

「軽蔑なんかしません」

「僕たちが、結局一つの目標に向っていることは確かなんだ。しかし、映と、僕とは、違う道を選んだ。二人とも、正しいと思っているんだ」

「お兄さんは、死んでしまふでしょうか」

「そんなことはない」と、久谷は答えた。「一年位は訓練だろう。それに、第一線へ行くには、若すぎる。一方、君や、お父さん達や、僕はどうかというと、アメリカが、日本を空襲するのは、もう間もなくだと云われているよ。死ぬかも知れない、ということは、どっちにも云えることだ」

「お兄さんは、今度のこと、よろこんでいたでしょ

う？」

「今度のこと、って？ 出征すること？」

「いいえ。黙って行かないですんだことよ」

「よろこんでいるよ。ゆうべ、二人で、お酒をのんでみた」

「どこで？」

「映の部屋でさ。二人とも、はじめてだろう。変だった」

「お酒をのむと、どうなるの？」

「頭が、がらがんしてさ。顔が、まっかになってさ。」

——二人でぶったおれて寝てしまった」

「いやね」

「一度だけ、死ぬことを話した。いや、死ぬことを話した、と云えないかな。つまり、生きているうちに、もつと沢山のことを、しなければならなかった、と云ったんだ。その通りだ。しかし、それは、映も、僕も、同じだよ。僕たちには、これから、戦争が、どういう風になっ
てゆくのか、少しもわからない。でも、映も云った。急いでは死なない。出来るだけ生きよう……」

久谷康国が、映の同級生で、親友として、麻布笄町の春香たちの家へやって来たのは、三年程前であった。久谷は、春香を可愛がってくれた。泰は、男の子だから、兄の友達と、自分の友達と見境いなかったが、春香は、

映の部屋へ侵入しなかった。しかし久谷は、来た時に必らず、春香に声をかけ、帰ってゆくときも、声をかけていった。春香が、学校の勉強のことで、二人のいる部屋へ行くと、映はよく冗談に

「僕は頭が悪いから、久谷にきけよ」と云い、しかしそれは皮肉でもないやがらせでもなく、久谷は、当然のことのように、質問に答え、映は、にこにこしながら、眺めていた。春香は、今度のことで、映が、久谷にだけ本當のことを打ち明けたのは正しかったと思う。

家に着いたのは、夜半であった。

「来たな」と、映が云った。

良孝も、佳子も、もはや悲しんだり、^{はら}肚を立てたりはしていないようであった。ある種の運命とか、不幸とか、一家を見舞ったときに、映が、偶然一番早く、それと接触したのだ。

佳子は、春香に、自分の傍に寝るように云ったが、春香は、前に、泰と一緒に使っていた二階へ行った。となりの、映の部屋には、久谷が泊ったようであった。おそくまで、話し声が聞えた。

映は、十年後に、春香と泰が、いくつになるのかと、湖のそばで聞いたが、春香には、そんなに遠い未来のことを想像することは出来なかった。映はいなくなる。しかし、父も、母も、弟も、久谷康国もいてくれるのだ、

と思つた。

夜明けに、春香のうめき声を、映がききつけた。

「春香！」と映は云った。

実を云うと、春香は、自分がうめき声を立てたことに気付いていなかった。湖の中に、脚をひたしている夢をみていた。

「春香」と、映は電灯をつけた。映のうしろに、久谷がいた。「どうしたんだ？」

「何が？」と、春香はびっくりした。

「うなっていたよ。いやな夢をみたのか」

「夢……」

いやな夢ではなかった。しかし、目が覚めてしまったので、春香は、起き上った。そのとき、春香は、膝のあたりに、激しい痛みを覚えた。

「痛いー」

「何処が痛いんだ？」

「ひざよ」

「見せろ」と、映は云った。八歳の春香の脚は、女のそれではなく、子供の足であった。

映の指が、膝のまわりのところどころをおさえたが、おされると痛いという風なものではなかった。

「立ってごらん」

云われた通りにすると、また痛みがあった。

「膝が、痛いわ」

「転んで、何処か打ったんじゃないのか」

映は、その質問を、春香と、久谷の両方へ、半分ずつ向けたようであった。久谷は首を振った。

「転ばない」

「膝の、中の方か？」

「うん」

「まげて」

「……………」

まげると、やはり痛みがあった。

「傷はないし、昨日まで、何ともなかったんだ。素人（しろうと）にはわからない。朝になったら、医者へ連れて行ってやる」

映は、春香のからだを、寝床の上へ横たえて、久谷と一緒に出て行った。

そのあとで、春香は、何度も、自分の指で押してみた。押すだけでは痛みはない。しかし、膝に重みがかかったり、屈伸をすると、痛みがあった。

朝になって、佳子が

「子供のリュウマチって、あるかしら？」と、笑いながら云った。そろそろからだを動かして食事をしてから、映と一緒に医者へ行こうとしたが、玄関へ出て靴をはいたところで、春香は動けなくなった。

「熱はないのよ」と佳子は云った。「山では、ちゃんと、お医者さんがいるんでしょ？」

「うん」

「変ね」

春香は、医者に来て、映と全く同じことをするのに気付いて、おかしくなった。じっとしていれば痛みはなく、からだのどこにも変調は認められなかった。

医者首をかしげ、血液検査をしよう、と云った。静脈から、血が採られた。

「結果としては」と、良孝は、役所へ行く支度をしながら云った。「疎開先で病気になるよりもよかった」

「でも、それだったら、もう少し安全なところへ越さなくては」と佳子が云うと、良孝は「考えてみる」と答えて、出て行った。

結局、映が発するまでに、春香は起き上がることが出来なかった。

九月三十日の夜、映は、春香の寢床のところに坐っていた。

「じきに、よくなるさ」と、映は云った。「みんな、多少は栄養不良だからね。きつと、食べ物関係なんだ」「お兄さんを、送りに来たのに……」

「会えただけいいと思う。上諏訪へ行ったのが別れだったと思ってくれ」

「お兄さんも、病気をしないでね」

「大丈夫だ」

「お兄さん」

「泣くことはないよ。戦争なんだからな。すぐに帰ってくる。泰のこと、頼んだよ」

「ええ」

曉に、映は、筭町の家を出発した。良孝が、隊まで送ることになった。久谷が行く、というのを、映はとめた。ひっそりとした別れであった。映が出て行ったら、春香は、蒲団の中で、思いきり泣いた。泣き続けているうちに、何のために泣いているのかわからなくなり、やめた。すると、少し心が晴れた。

3

映から、最初の手紙が来たのは、ひと月たってからであった。かたい字をいつも書いている映にしては、急いだためか、崩れた字であった。

やつと手紙を書くことを許されました。この手紙は、春香に宛てて書きますが、御両親様へも宛てた手紙です。春香によくわからないことがあつたら、お母さまにきいて下さい。

入隊した翌日から、毎日激しい訓練です。飛行場を中